



# 2月号

# ひだまり

今月のエッセー

## バトンタッチ！

「もう一年あるから大丈夫！」  
 そんな風に思いながら私は、ちょうど一年前の今日、先輩の背中を見ながら仕事をしていました。  
 私が所属する研究センターは、三年間の中で様々な研修を行います。例えば、みなさんの在苑している「ルンビニ合掌苑」に訪問することも大事な研修の一環です。もちろん、それだけではありませんと自分で企画し運営するというところで重要な研修の一環です。運営の中でそれぞれ仕事の分担が必要になってきます。私たちは年度によって仕事の分担を行い、それぞれ仕事の量も当然の

ことながら年度を増す度に増えていきま  
 す。昨年の今頃は「先輩も居るし何とか  
 なる、もう一年あるから大丈夫！」と、  
 そんな何の根拠もないのに変な自信があ  
 りました。おそらくその頃は、先輩の後  
 を追って時間をかければ何とかなる…そ  
 のように思っていたのだと今はそう理解  
 できます。  
 実際、先輩からたくさんのことを学び  
 ました。実務的なことをはじめ、さまざま  
 なことを細かく丁寧に教えていただき  
 ました。その中で特に心の中に残ってい  
 るのが「せっかくやるのだから、楽しく  
 やろう！面白おかしくということではな  
 く、自分たちがしっかり意義をもってや  
 ろう」という言葉でした。私は、どちら  
 かといえば腰の重い方でなかなか積極的  
 にことを進めることができませんでし  
 た。しかし、先輩の話聞いてからは徐々  
 にですが気持ちの変化が起こってしまし  
 た。今では「もっと意義のあることがで  
 きたら」そんな風にも思えるようになって  
 います。  
 この気持ちを胸に、次に中継していき  
 たいと思います。  
 ◆伊藤正法

## 仏教のことば

けいせいすなわちこれこうちようぜつ

### 溪声便是広長舌

さんしきあにしょうじょうしんにあらざらんや

### 山色豈非清浄身

“ 谷川のせせらぎは仏の説法の声

山のたたずまいは清浄な仏の姿 ”

宋の詩人である蘇東坡の詠んだ詩の最初の句が今回取り上げる「溪声山色」という言葉です。川の流れるや山々の色、つまり目に見えるもの聞こえるもの全てがそのまま仏様の説法であり、お姿であるというのです。大学卒業後、福井県にある永平寺に上山しました。三年目を迎える春、私は修行道場を後にしました。修行中は永遠とも思える時間の流れがいざ下山を決めてからはあつという間に過ぎ去り、「本当にこれで良いのか？」残って修行した方が良いのでは？」という思いに悩まされました。下山当日、永平寺の伽藍に向かっ

て最後の礼拝を済ませ、山門を背に歩き始めた自分の目に飛び込んできたのは、空に向かって鬱蒼と葉を茂らせる境内の木々でした。  
 大小様々な木々のどれもがみな等しく、威厳を湛えながら「ただそこにある」さまに私は圧倒されると同時に親しみを覚えました。修行を終えた今後の行く末の不安に駆られていた自分に、「焦らず、背伸びせず、あるがままを受け入れて行きなさい」と言ってくれているように思えたのです。目の前に広がる雄大な自然が、その時の私にとっては仏様の教えだったのです。  
 ◆本田真大

## 編集後記

「会うは別れの始め」

こんなことわざがありますね。人との出会いはかけがえのないご縁によって起きます。しかし、その一方で別れがあることも事実。百人との出会いがあれば百回の別れがあります。  
 一度だけの人生で出会えた人々、今あなたの周りにいてくれる人。その人たちに、常に誠意と感謝の心を持って接していれば、いつか別れがきた時、悲しみや寂しさは感じてても、後悔はないでしょう。  
 別れは辛いものですが、その人と出会えたこのご縁に感謝し、そして新たな門出を祝いたいものです。

◆深澤亮道

発行 曹洞宗総合研究センター教化研修部門

〒一〇五・八五四四

東京都港区芝二・五・二曹洞宗宗務庁内

☎〇三・三四五四・六八四四

三年間、ありがとうございました！



田中仁秀さん  
出身地…長野県  
趣味…読書



私がルンビニ合掌苑にお世話になって早くも3年が経ち、この度修了の時期となりました。正直、あっという間であったと感じております。

私はこの3年間で何度か法話を担当させていただきましたが、人生の大先輩である皆さんを前にして、「どのような言葉をかけることができるのか。」「仏教の魅力をちゃんとお伝え出来るだろうか。」と自問自答しておりました。しかし、皆さんの温かいお言葉や笑顔によって、不安と緊張が段々と無くなっていき、「今度はどうのようなお話をしようかな。」と前向きな気持ちに変わっていきました。これもひとえに皆さんの温かいお心遣いによるものであったと感謝をしております。

ここで学ばせていただいたことを糧として、今後も精進して参ります。今までありがとうございました。

特別企画

さよなら3年度生



田代浩潤さん  
出身地…静岡県  
趣味…散歩



私はルンビニ合掌苑で法話するのが嫌でした。というのも、私よりずっと長く生き、様々な経験を経た人を前に、自身の薄っぺらな経験を頭でこね練り回し、それをもとに「僧侶」という肩書で人生論を語るということが、身の丈知らずで愚かしく思うからです。一方、好きだったのはお昼を一緒にいただく時間です。その時は「坊さん」という肩書を離れ、一人の人間として皆さんと接することが出来た様に感じるからです。そこで一緒に居た方の人となりや垣間見ると嬉しかったですし、私にとって心の栄養にもなった様思うのです。

今後も肩書というより、出来る限り一人の人間として人と付き合っていきたい。三年間を振り返り、そんなことを思いました。皆さん、ありがとうございました。